

博士論文

Being-in, Being-for, Being-with の視点による  
不登校中学生の成長過程  
—相談学級の生徒に対する SGE を通して—

2020 年度

大学院心理学研究科臨床心理学専攻

川端 久詩

東京成徳大学

## 論文概要

本研究では Moustakas の「Being-in, Being-for, Being-with」の 3 種類の人間関係の視点を基盤にした相談学級の不登校生徒の成長過程を明らかにすることを目的とした。

研究 1 では中学校相談学級の生徒 9 名を対象に，実態に即して配慮した SGE エクササイズを作成し，プログラムを構成して実施した。人間関係尺度，自尊感情尺度，進路決定不安尺度による事前事後の測定で効果を判定した。その結果，進路決定不安の軽減，自尊感情の改善傾向が効果として認められた。

研究 2 は不登校生徒の体験過程にどのような変容があるかを調べる目的で「SGE 体験過程質問紙」を作成し，適応指導教室，相談学級あわせて 3 か所で SGE の実践を行い，不登校生徒の SGE 体験過程を調べた結果，ドラマエンカウンターを行った B 教室において事前と事後の受容感，自己受容，自己決定に有意差が認められた。

研究 3 では不登校生徒の人との関わりによる成長過程を解明するため，相談学級で演劇に出演した 3 名の不登校生徒の日記，文集，そして一部の生徒への半構造化面接を通して，Being-in, Being-for, Being-with の 3 種類の人間関係を抽出し，検討した。その結果人間関係のプロセスに Being-in, Being-for, Being-with の順序性がみられた。さらに卒業後 10 数年を経た（当時と）同じ演劇出演生徒 3 名に半構造化面接を実施した結果，以下のことが示された。① Being-in には，理解受容する側，理解受容される側の相互の関わりがある。② Being-for には，他者のために働きかける側，他者から働きかけられ

る側の相互の関わりがある。③Being-withには自己主張する、自己主張されるなどの相互の対決的な関わりがある。④Moustakasの3種類の人間関係 Being-in, Being-for, Being-withに加え、関わりの結果としての自分自身の変容が、気づきや行為行動、決意や意志としてあらわれているものがあり、これを Being-self として概念化した。

⑤すべての出演生徒の人間関係は Being-in, Being-for, Being-with(self)の順序性で深まった。

研究4では相談学級での教育実践をもとにした不登校生徒の成長過程に関する仮説モデルを作成した。

研究5では研究4の仮設モデルの検証を目的として、フリースクール修了生の成人5名に半構造化面接を行ったところ、①全員の人間関係が Being-in, Being-for, Being-with (self) の順序性で深まっていた。②フリースクールにおける Being-in に関しては、全員がフリースクールに通う以前に親によって不登校であることを受容してもらっている。また全員がフリースクールの受容的な「雰囲気」を感じている。③Being-for, Being-with, Being-self の相互の関わりは全員が相談学級の3名と同様だった。

本研究の理論的貢献として、学校心理学における3種類の人間関係モデルを発展させたことがあげられる。Being-in, Being-for, Being-withで子どもと教師(カウンセラー)だけでなく、子どもと子ども、子どもと仲間拡大したこと、Being-selfを概念化したことの2点である。実践的貢献としては、ドラマエンカウンターについての研究成果、不登校の理解と援助に枠組みを提供したことである。

Being-in, Being-for, Being-withの順序性を生徒と教師の関わり

の指標として用いることで、個々のケースの不登校支援の現在地がわかり、今後の支援に道筋や見通しを持てるようになったと考える。

また実践者は自身のモチーフを生かした支援方法・教育内容を展開することができると思う。不登校の居場所の設置目的や教育内容が Being-in, Being-for, Being-with の3種類の人間関係に基づいて構成されていることを説明することで、利用者にとってのサイコエジュケーションとなり、作業同盟を組むことにつながる。居場所での教育的プログラムの意味や目的を理解し、居場所で支援を受ける道筋がみえ、参加動機を高め、将来についての見通しができ、体験における効果や進路意欲が高まることが期待できる。

今後、質的データの分析方法を充実させ、研究対象を広げ保護者の理解の低い不登校児童生徒について研究し、さらに発展させていくことが望ましいと考えられる。